

8月1日号 (1975)

財 界

圭三 農業移民としてブラジルへ渡ったマベさんが、絵で世間に認められるようになったのは、いつごろですか。

マベ 一九五七年に僕は自分のコーヒー園を捨てて、親父の遺言には背くけれども、プロの絵かきになろうと思ひ、サンパウロに出ました。五八年に色々な展覧会に出品して注目されるようになりました。そして、五九年にはサンパウロ・ビエンナーレで最高賞を受賞したんです。それから十日後、今度はバリ青年ビエンナーレで最優秀賞をもらったんですよ。これでタイム誌が、「マベ黄金の年」という特集記事をのせてくれるし、ブラジル国内でもワーツといい出したんです。

圭三 受賞した作品は、抽象画だったと聞いていますが……。

マベ 勿論、アブストラクトです。

圭三 コーヒー園を経営していたマベさんが、なぜ絵の道へ進んだのか、その辺が理解しにくいんですがね。

マベ 絵は子供のころから好きだったんですよ。日本からブラジルへ移住する時も、クレヨンや二箱ぐらい持っていたほどですからね。

圭三 “好きこそものの上手なれ”というわけですね。

マベ 雨の降る日とか、日曜日には、画用紙にクレヨンで絵を描いて、できあ

がった絵を壁にはっていたことを覚えています。十六、七歳ごろまで、クレヨンを使っていた。

圭三 絵の先生に習わないで……。

マベ ブラジルの奥地なんですから、絵の先生なんかいませんよ。

圭三 学校では、絵の授業はなかったんですか。

マベ ブラジルの日本人学校というのは、小さな学校で、絵の専門の先生なんていないんです。一人の先生がなんにもかも教えるんですよ。たとえば、日本の師範学校を出た先生がいれば、それはまだいいほうなんです。中学校を出た程度の人でも、日本語教師になって教鞭をとっていたくらいですからね。



圭三 それじゃ、寺小屋と同じだ。

マベ そうなんです。

圭三 油絵具を使って描くようになったのは、何歳の時ですか。

マベ 十八、九歳の時だったと思うんですが、サンパウロへ出た時、文房具屋の前で油絵具を見たんです。その油絵具を使ってみたいと思って、すぐ買いました。ところが、油絵具の溶かし方がわからないわけです。水では溶けないものだから、石油ランプに使う石油で溶かしてみたんです。そうすると溶けることがやっとわかった。

圭三 そういうふうに、油絵具の使い方から自分で勉強したんですか……。

マベ そうするしかなかったんです。

だから、最初は油絵具を水彩を描くように溶かして、画用紙に塗っていたので、油絵らしい油絵じゃなかったんですよ。油絵具の使い方を教えてくれたのは、クモサカというサンパウロにいた写真屋なんです。この人は絵を描くと聞いたので、僕の描いた絵を見てもらおうと思って、サンパウロへ行きました。クモサカさんは、僕の絵を見て、うまく描いているけれども、油絵というのはこんなものじゃないと言いましたね。第一、画用紙に油絵を描いちやいかん。そんなに絵が好きなら、キャンパスの作り方を教えてやろうといって、キャンパスの作り方を

教えてくれたんですよ。

圭三 それがマベさんの画風というか、マベ・オリジナルの基盤になっているんじゃないですか。

マベ なんでも自分でやるということ、僕の絵の重要な要素なんです。

圭三 それは、電気釜でごはんを炊くのを覚えるのと、釜で薪を燃やしなから、煙にむせてごはんを炊くのを覚える違いじゃないかと思うな。この違いは、非常に大事だと思うんですよ。

マベ おっしゃるとおりですね。僕の息子も大きくなりましたけれども、僕の少年時代、青年時代とはまるで違うんですよ。ものの有難さどころか、おもしろさもないんじゃないかな。

圭三僕は、ものへの興味を失ったから、芸術家なんかになれないと思うし、それよりも、人間としての喜びというものを感じないだろうと思いますね。

芸術家には恵まれた国

圭三 マベさんは、お父さんの遺言に背いて、コーヒー園を捨てて、画家になったわけですが、日本にいた場合、はたして画家になったでしょうか。

マベ 日本にいても絵はやってと思いますが、いわゆるチャンスには、日本にいたら恵まれなかったと思うんです。

圭三 そのチャンスというのは？